

熊本学園大学 機関リポジトリ

足立明先生追悼号刊行によせて（足立明先生追悼号）

著者	花田 昌宣
雑誌名	水俣学研究
号	6
ページ	3-5
発行年	2015-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00000773/

足立明先生追悼号刊行によせて

花田 昌宣

熊本学園大学水俣学研究センター長

2012年8月26日、本研究センターの客員研究員であった足立明さん（京都大学東南アジア研究センター教授）が他界した。享年59。足立さんは、京都大学工学部を卒業後、文化人類学研究をこころざし、大阪大学に籍を置いてスリランカに留学し、7年間にわたり農村開発と労働交換に関する現地調査に従事していた。北海道大学に職を得られたあと、2000年4月に京都大学東南アジア研究センターに移られた。

足立さんの研究の特徴は、たえず現地に足を置きつつ、文化人類学の破綻を超えようとする理論的・思想的な方法論の彫琢を目指していたところにある。私たち水俣学研究との交錯点もそのあたりにあった。

私事にわたるが、足立さんとは小学校以来、中学、高校と同級の友人で、実に楽しいつきあいをさせていただいていた。本センターの宮北隆志さんとも縁が深く高校、大学と同じところにいた。原田正純先生がヒ素や水銀汚染の調査でスリランカを訪問した折には、足立さんが案内し、原田先生に象に乗ってもらったとのことだった。

わたしも、足立さんが進めていたスリランカの開発研究に加えていただき、何度も現地調査に連れていってもらい、私にアジアの開発研究という問題視角を植え付けてくれた。その恩返しにと水俣に誘ったのが水俣学との縁であった。足立さんと私とは、文化人類学と経済学、スリランカとフランス、とフィールドも異なり、開発研究と水俣学と持ち場も分かれ、足立さんの洒脱な享乐的な語りと私の禁欲的な言説と性格も違っていたが、長年道行きを共にしてきたという意識だけは強く持っていた。

2008年5月に本センターが開催したシンポジウム「障害学と水俣学の交差点」にコメントータとして招聘し、また、2010年6月18日、「水俣学とアジア・アフリカ研究—接点を求めて」と題した定例研究会にもおいでいただいた。そこでの彼の水俣学に関する発言に秘められた炯眼ぶりにはいつものことながら感服させられていた。彼との討論の中から、アクター・ネットワーク論にもとづく水俣現地研究を進めるはずで、2010年度から始まった戦略的研究基盤形成支援事業や、また私どもの科研にも加わっていただいていた。水俣にも何度か来てもらい、井上ゆかりさん、田尻雅美さんらの研究助手たちと一緒に水俣を回り、その好食漢ぶりは本センターでも人気をよんだ。

その足立さんが、2012年の3月ごろ、科研費の分担研究者から下ろして欲しいといてきた。体調が思わしくないで研究を続けることができないかもしれないとのことだった。その後、あっという間に逝ってしまった。

水俣学研究という枠組みで共に仕事をし始めたばかりであったし、足立さんにとっては、

最後の研究課題になってしまった。彼がし残したことは、私たちに遺されている。

足立さんが他界してから、京都大学では、翌年3月30日に東南アジア研究センターで追悼の催しが開かれた。それにあわせて京都大学で足立さんとともに京大安全センターを作ってきた経済学部の中仁宏幸教授から、大学院経済学研究科主催ということではあるが、足立さんにゆかりのある方々を講師に「水俣病、アスベスト、胆管がん問題の社会経済的要因」と題して、追悼シンポジウムを開きたいという企画が組織された。

本追悼号に収録したのは、このシンポジウムの記録である。中仁教授と相談して、『水俣学研究』に収録することとさせていただいた。なお、花田報告は、当日資料として配布した報告原稿をリライトしたものである。宮北報告および片岡報告は、当日の発言のテープ起こし資料をリライトした。



2007年7月25日～28日、熊本学園大学大学院集中講義「開発と環境特殊研究」の後、水俣訪問された際の写真。後日、この写真はご本人より郵送された。

弔 辞

足立明君

南桜塚小学校、豊中第一中学校、豊中高校と子ども時代から共に学びともに遊び一緒にすごしました。その後、ともに研究者の道を目指し、君はスリランカに、私はフランスに旅立ちました。

中学校ではともに陸上部、君は足が速かったのですが、その体格を生かして砲丸投げを選びました。天文の道に魅かれ、なんだか一緒に生駒山天文台に行って六〇センチメートルの反射望遠鏡を自由に使わせてもらいました。冬だったのであまりに寒くて明け方、山上でたき火をして二人してしかられ、出入り禁止になりました。中学二年のある日、週刊読売のグラフ雑誌を持ってきて、これ何とかせなあかんといいにきました。アメリカ軍のベトナム空爆の写真で、署名というのをしたらええんや、といい出したのが足立君でした。

高校にはいりますと二人は当たり前のように地球物理研究会にはいります。屋上に部屋があつて、ほとんど治外法権、週末には、月食だ流星群だと言つては、徹夜観測と称して泊り込んでいました。夜中になると食堂に忍び込んでハムを失敬してきたり。夜中の理科実験室での卓球も恒例行事でした。足立君の発案だつたと思うのですが、負けたらウイスキーを一杯飲むというペナルティ。勝ち続けているので一向にのめない足立君でしたが、なぜか飲んでいましたね。

そんな高校生活にも学生運動の波が押し寄せ、試験制度や能力主義、差別をめぐつて生徒同士で授業やテストをつぶして熱心に議論していました。三年の時でしたか、地球物理研究会の屋上で、足立君は新しい宗教を起こした、と言い始めました。いま、思えば足立君の文化人類学の始まりでした。幸せ教といったか、何を言われても、何をされても「幸せです、ありがとう」と言おうというものでした。口を尖がらせて議論している中で、その巨漢を揺らせながら「ありがとう」です。そのうち、新聞紙を丸めて足立君の頭をひっぱたきますとやはり「ありがとう」と返ってきます。長くは続きませんでした、大真面目に笑いあつたことでした。

君は私をスリランカ研究に誘つてくれ、私は君を水俣学の研究に招きました。まだまだこれから一緒に仕事をするはずでした。

いつだったか、君と輪廻転生の話になったとき、功德を積んだら極楽に行けるというのは近代の産物なんやと教えてくれました。その君が、子犬が一匹で歩いていたら僕だから声をかけてくれよと言っていました。

情に厚く、細やかな気遣いの足立君、明晰さと軽妙さの足立君、少しゆっくり休んでください。私も子犬となって、またお会いしましょう。

二〇一二年八月二八日

おさななじみ

花田昌宣